

ヨーロッパ式単位制度による言語教育  
—— 言語活動における必要事項の決定 ——

広 瀬 孝 文

**Definition of Language Needs in  
a European Unit/Credit System**

**Takafumi Hirose**

This is a brief introduction to a European unit/credit system and a way of determining language needs as has been proposed by René Richterich. Much of this article has been based on *Systems Development in Adult Language Learning* by J.L.M. Trim, René Richterich, J.A. Van Ek, and D.A. Wilkins published by Pergamon Press for and on behalf of the Council of Europe in 1980.

**I. ヨーロッパ式単位制度と言語教育**

**A. 欧州統合と言語教育**

国家の枠を越えた法的結合体形成を目的とした欧州統合運動は、欧州石炭鉄鋼共同体 (ECSC)、欧州経済共同体 (EEC)、欧州原子力協同体 (EURATOM) を母体として成立した欧州共同体 (EC) の確立と共に一層強化されたが、こうした政治・経済的利害関係を直接取り扱う統合運動とは別に、人間生活を通して統合を図ろうとする非政治的な動きが、地味ではあるが着実に行われてきている。この運動の中心となっているのは、1949年5月5日に設立された、フランスのシュトラスブールに本部を置く欧州会議 (Council of Europe=CE) である。設立当時の加盟国は10か国であった CE は、今日では、21の加盟国を持っている。EC の加盟国数は10、北米を除く NATO の加盟国数が13であるのに対し、21もの加盟国を持つ理由は、CE の取り扱う問題は、社会・文化・科学・法律・行政・人権など、比較的政治色のうすいものであるため、スイス、オーストリア、スウェーデン、アイルランドなどの中立または中立主義国家をはじめ、政治的利害関係が一致しない国でも容易に加盟できるようになっているからである。

こうした非政治的な側面における欧州統合運動は、数多くの分野で行われているが、特に文化的な面に焦点を当てたのが、1962年1月1日に設立された文化協力会議 (Council for Cultural Cooperation=CCC) である。

CCC は、数多くの文化活動を検討の対象としてきたが、その一つに生涯教育プロジェクト (Project on Permanent Education) という企画がある。生涯教育は、文字通り、揺りかごから墓場までの教育

を意味し、学校教育終了と同時に個人の教育体験も終了するのではなく、その後も、何らかの形で、教育に接する機会を作り出すことを目的としている。従って、生涯教育は、おもに、成人教育を中心とした教育計画であると言ってよい。

この生涯教育は、当然具体的な内容を必要とするが、ヨーロッパという環境の中でまず第一に取り上げられたのが、第二言語（外国語）の教育であった。CCCに加盟している20数か国において、共通な原則に基づいた言語教育を行うことが、果たして可能であろうか。このような可能性を探るために、1971年5月のスイスのリュシリコンにおけるシンポジウムをはじめとして数多くの検討がなされた結果、「近代語プロジェクト（Modern Languages Project）」が誕生した。

本稿は、欧州統合の一環として手懸けられている言語教育の統一という問題について、その概要と具体的な例の一つを示すものである。

### B. ヨーロッパにおける言語教育の重要性

ヨーロッパは、さまざまな言語が混在する地域であり、このような地域において統合の問題を論じる場合に、言語教育が一つのテーマとなることは、しごく当然であると言えよう。ここで誤解してはならないのは、ヨーロッパにおいて均一化が目指されているもとは、言語教育法であって、言語そのものではないということである。「言語教育」と「統合」という二つの言葉を聞くと、往々にして、英語とかロシア語などという特定の言語を普及させることによって統合を図ることのように受け止められがちであるが、教授される言語は何でもよいのであって、それらの言語が教授される方法や枠組が統一されるのであるということを忘れてはならない。すなわち、今回のプロジェクトの目的は、一つの強力な言語をできるだけ広範囲に普及させることではなく、さまざまな言語が、個人の必要に応じて、できるだけ容易に学ぶことができるような方法を見出すことである。

このような意味での言語教育法の統一が、なぜヨーロッパに必要であり、ヨーロッパにふさわしいものであるかということは、次のような一般的理念によって明らかにされる。

1. ヨーロッパ諸国間における相互理解を完全に達成するためには、言語の壁を克服しなければならない。
2. ヨーロッパにおける言語の多様性は、ヨーロッパの文化遺産の一つであり、この言語の多様性は、統合の妨げではなく、これを学習することが知的生活の向上につながるものであると受け止めるべきである。
3. ヨーロッパの近代諸語の学習が一般化してこそ、ヨーロッパにおける相互理解と協力が可能となる。
4. ヨーロッパにおける近代諸語に関する知識の増大は、諸国間の関係と交流活動を強化するものであり、同時に、これらは、経済的・社会的発展の基礎ともなると考えられる。
5. 近代語の知識は、もはや、エリートのみが所有するものではなく、あらゆる人々が所有することのできる交差的財産である。

このように、ヨーロッパにおける言語の多様性を認めた上で、欧州統合の動きの一つとして言語教育を均一化しようとする試みは、世界的にもユニークな試みであると言えよう。

### C. 生涯教育とヨーロッパ式単位制度

生涯教育，すなわち成人教育は，一般的で幅広い知識の教授を目的とする学校教育と比較した場合，ある程度の実用性が判うことが前提とされる。なぜならば，成人教育においては，授業を受ける者のほとんどが時間的制限を受けており，学習者独自の力では，幅広い一般教育の中から個人の生活と関係のある実用的な部分を取り出したり，それを個人的に応用できるレベルまで発展させることは，とうてい不可能なことであるからである。このように，成人教育は，実用性も考慮した上で，学校教育とは別の枠組の中で計画されなければならない。

成人教育は，時間的制約という点を考慮に入れた場合，学校教育のような総括的で集中的な教育方法ではなくて，パートタイムの学習が長期に渡って継続されるものであることが好ましいのは言うまでもない。こうした中から考案された指導法がヨーロッパ式単位制度（European unit/credit system）である。学校教育の場合は，ある教科（subject）を総括的なものとして取り扱い，その教科に含まれるすべての事柄の学習が終了した段階で単位習得の認定が行われる。しかし，この方法は，時間的要素や実用性を考慮した場合，成人教育には不適當な方法であると言える。そこで，この一つの教科を，幾つかの履習すべき学習単位（units）に分けて，それら個々の学習単位を履習するごとに単位の認定書（credit）を与えるという方法が考えられる。

生涯教育においては，このような方法には幾つかの利点を挙げることができる。

まず，第一に，この方式においては，一気に大量の内容を習得する必要がないため，授業から脱落する確率が大幅に減少することが挙げられる。一つの教科が複数の短い学習単位に分かれているため，教科の途中で学習を中断する必要が生じた場合には，すでに習得した学習単位については認定書を確保しておいて，再度学習が可能な時に次の学習単位から学習を再開すればよい訳である。

第二に，この制度の下においては，個人の必要に応じたカリキュラムを編成することができる。たとえば，ここに，5人の異なった関心を持つ学習者がいるとすると，本来ならば，5人とも同じ内容の授業を受けて，その中から各自が必要な部分だけを活用するという形式になるが，これでは，授業を受ける方側としては，時間的に大変不経済な結果となる。逆に，一人一人の需要に合った授業を行おうとすれば，五つの異なった授業を別々に行わなければならない。そこで，この教科を，仮に a～i という九つの学習単位に分けたとすると，学習者 I～V は，a～i から自分に必要と思われる学習単位のみを選択すればよいことになる（図表 1 参照）。こうした場合，学習者 I は，a・b・c・e の学習単位を習得することによって，学習者 II は，a・b・c・d・h・i の学習単位を習得することによってそれぞれの需要を満たすことになり，各自の必要に応じたカリキュラムが成立する訳である。

第三の利点は，それぞれの学習単位は，比較的まとまりのよい短い内容のものであるため，統一することが可能であるということである。すなわち，ハンブルクの A という教科の b という学習単位も，ウィーンの A という教科の b という学習単位も，同じ内容にする

図表 1：学習単位区分とその選択の例

学習者	学 習 単 位								
	a	b	c	d	e	f	g	h	i
I	○	○	○		○				
II	○	○	○	○				○	○
III	○	○		○	○		○		
IV	○	○		○		○	○		
V	○	○				○	○	○	

ことが比較的容易である。また、生涯教育の場合、必ずしも同一教育機関で学習を続けることができるとは限らないので、住居が移動しても学習過程には支障が生じない訳である。さらに、統一されたテストの実施によって、ヨーロッパのどこへ行っても習得した単位が認められるということにもなる。

このように、ヨーロッパ式単位制度は、成人教育には最も適した形式の学習形態であると言える。

#### D. 生涯教育における言語教育の必要性

ヨーロッパ式単位制度に基づく生涯教育は、あらゆる分野における教育の統一を図ったものであるが、まず第一に検討の対象となったのが、第二言語（外国語）教育の分野である。ヨーロッパにおける生涯教育で言語が最初に取り上げられたのは、上に述べたような一般的理念がその背景にあるが、それ以外に、より現実的な理由も見ることができる。

ヨーロッパにおいて、母国語以外の近代語が学校教育の中に定着し始めたのは、ごく最近のことで、日本と事情はさほど変わらない。しかも、この傾向は、CCCのすべての加盟国において満足できるレベルで普及している訳ではなく、母国語しか話すことのできないヨーロッパ人は相当な数に<sup>のぼ</sup>るし、その人口比は、年齢が高くなるごとに増す傾向にある。また、若い人が外国語が流<sup>ちよう</sup>暢になればなるほど、中年層の間では、外国語ができないとことが大きな問題として浮かび上がってくる。

さらに、現在のヨーロッパでは、かなりの人数が、自分は外国語ができると言っているが、実際には役に立たない場合が多い。言語能力は固定財産ではなくて、使用を怠ると目減りするものであることを知っていなければならない。また、学校における言語教育は、生徒の学習意欲、教師の言語能力、教授法などが不十分なことから、効果的ではない場合がよくある。従って、本人は、何年も外国語を学習して一応その言語が話せると思っ<sup>て</sup>いても、実際には役に立たないことが多い。

また、学校で教えられる外国語には、実用性が判わ<sup>な</sup>い場合が多い。もちろん、生徒達は、将来、自分がどのような職業につき、どのような外国語を必要とするかは分からない訳であるから、ただ、なんとなく外国語（ほとんどの場合は英語）の授業を受けることになる。そして、外国語の本当の必要性に迫られるのは、社会に出てしまった後であることがよくある。このような状況において、生涯教育が重要視されるのは当然であると言えよう。

こうして、生涯教育としての言語教育の方法が一つの課題としてヨーロッパで検討されることになるのであるが、ここで開発された教授法の一部が、数年後には学校教育の分野においても検討の対象となることは、興味深い事実である。

以上が、ヨーロッパ式単位制度における言語教育の一般論であるが、どのようにしてこれを実用化するかが、次の大きな課題となる。では、その現実化の過程の第一歩を見てみよう。

## II. 言語活動における必要事項の決定

### A. 生涯教育における言語教育の特徴

学校という学習の場で学問として学ぶ外国語は、それがどのような近代的施設の下で行われる実生活を再現した教育であっても、最終的には一般的学問の一分野であり、生きた言語活動にはなり得な

いことは、これまでの学校教育の実態を通してすでに明白となっている。しかし、このような学校における言語教育の実態は、教育方法の不備のためであると決め付けてしまう訳にはいかない。なぜならば、生徒の言語生活の場は、正に学校であり、ホテルでもレストランでも旅行代理店でもなく、学校以外の言語状況を経験することは、ごくまれであるからである。従って、学校における言語教育は、将来、生徒がどのような言語状況に置かれることになっても、それまでの学校における言語教育を基礎として、その上に積み上げることのできる一般的な内容のものにならざるを得ない。

一方、生涯教育における言語学習は、現在学習者が置かれている言語状況において、即、役に立つものでなければならない。時間的・経済的制約の下で行われる言語学習は、学校における学習のように、単語・文・文法などの段階的発展に基づいた一般的な内容の学習単位に分割されたものではなくて、言語活動・言語状況などを中心とした実用的な内容に基づいた学習単位に分割されたものでなければならない。これが、学校教育と生涯教育における言語教育の最も基本的な相違点であり、どちらかが他方の教育目標に基づいた教育を行えば、その不適合性が指摘されるのは必至である。

このような理念の下に展開される生涯教育の一環としての外国語教育は、必ずしも完璧であるとは言い切れない。どのような状況に置かれたときにどのような言語事項が必要となるかは、たいていの場合予測することができるが、予測できない場合もある。日常の生活様式や言語活動の習慣を知っていれば、一定の条件の下では一定の言語事項しか要求されないが、突発的な出来事や予期しない人などに会った場合には、予測していなかった言語事項が必要となってくる。これは、言語活動や言語状況を基本として学習単位が設定されている生涯教育の言語指導法の場合、どうしても免れることのできない短所と言えよう。このような意味においても、この教育方式が学校教育に容易に取り入れられないことは、十分に理解できる。

しかし、学校における外国語教育は、すべての状況に応用できるのではなく、もしかすると、どんな場合にも全く応用がきかないかも知れない。生涯教育における言語教育は、すべての場合には応用できないことを承知の上で、少なくとも一つか二つの限られた状況においては、確かに役に立つものを習得させるという、ごく現実的な目標の下で展開されるものである。

## B. 学習単位の内容の決定過程

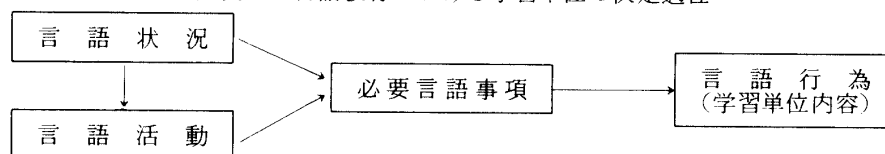
このような観点において生涯教育の一環としての言語教育を具体的な角度から考える場合、最も重要なことは、言語という広い領域に及ぶ知識を、何に基づいてどのような学習単位に区分すべきかということである。CCCの研究においては、学習単位の設定は、次のような段階を経て行われるのが最も効果的であると考えられるようになった。すなわち、

1. 言語が使用される状況と言語活動の系統化と分析
2. 言語活動における必要事項（必要言語事項）の割り出しと決定
3. 必要言語事項に伴う言語行為（実際に何を話すかということ＝学習単位の内容）の決定

である。これを図示すると、図表2のようになる。

この過程において、言語状況と言語活動から必要言語事項を割り出すことが一つの作業であり、必要言語事項から学習単位内容を決定することがもう一つの作業となる。これら二つの作業は、全く異

図表2：言語教育における学習単位の決定過程



なった内容の作業であり、本稿では、この前者を取り上げて検討することにする。

### C. 言語活動における必要事項を決定する諸要素

必要言語事項の割り出しと決定までの作業についての研究は、ベルン大学のリヒテリッヒを中心として行われてきており、今日までにその分析法のモデルが提案されているので、それをここに紹介してみよう。

リヒテリッヒのモデルでは、必要言語事項を決定する諸要素は、「言語状況」と「言語活動」の二つに大きく分けられている。「言語状況」には、言語を使用する「人」、言語が使用される「時」と「場所」が含まれており、「言語活動」には、コミュニケーションによって達成されなければならない「機能」、話の内容とも言える言語行為の「対象」、それに言語行為が行われる「方法」が含まれている。これらの各項目は、さらに多くの細目に分けられているが、それらの内容は、次に挙げる通りである。

#### I. 言語が使用される状況 (situations)

##### A. 言語を使用する人 (agents)

##### 1. 身元調査 (identity)

##### a. 職業

—— 地 位 ——

- (1) 学生
- (2) 肉体労働者
- (3) 外国人労働者
- (4) 事務員, 秘書
- (5) 技師, 現場監督

(6) 管理職

(7) 自営業

—— 職 種 ——

- (8) 商工業
- (9) 行政機関
- (10) サービス業
- (11) 科学, 技術, 知的職業
- (12) 農林水産業

##### b. 職業以外の活動

- (1) 旅行者

- (2) 日常生活
- (3) 文化活動（読書，講演を聞く，映画を見る）
- (4) 二次的用途（政治，スポーツ，趣味）

c. 年齢

d. 居住地

e. 性別

f. 婚姻歴

g. 氏名

（a と b については，言語が使用される場合の職業や活動）

## 2. 言語を使用する人数（number）

a. 1人

b. 2人

c. 3～5人

d. 6～12人

e. 13人以上

## 3. 言語を使用する人の役割（roles）

### a. 社会的役割（social roles）

- (1) 上司－部下
- (2) 同僚－同僚
- (3) 老人－若者
- (4) 教師－生徒
- (5) 重要人物－一般の人
- (6) 買い手－売り手
- (7) 質問者－応答者
- (8) 初対面者－初対面者
- (9) 友人－友人
- (10) 敵－敵
- (11) 夫－妻
- (12) 親－子
- (13) 親－親
- (14) その他

### b. 心理的役割（psychological roles）

- (1) 尊敬
- (2) 服従
- (3) 賞賛

- (4) 愛情
- (5) 連累
- (6) 思いやり
- (7) 対等
- (8) 中立
- (9) 反感
- (10) 軽蔑<sup>べつ</sup>
- (11) 恐怖
- (12) 遺憾
- (13) 憎悪
- (14) 嫉妬<sup>しつと</sup>
- (15) その他

c. 言語的役割 (language roles)

- (1) 1人の話し手
- (2) 1人の話し手+1人の聞き手
- (3) 1人の話し手・聞き手+1人の聞き手・話し手
- (4) 1人の話し手+複数の聞き手
- (5) 1人の話し手・聞き手+複数の聞き手・話し手
- (6) 複数の話し手+1人の聞き手
- (7) 複数の話し手・聞き手+1人の聞き手・話し手
- (8) 複数の話し手+複数の聞き手
- (9) 複数の話し手・聞き手+複数の聞き手・話し手

B. 時 (time)

1. 1日のうちで言語が使用される時 (time of day)

- a. 午前中
- b. 午後
- c. 夕方, 夜
- d. 常時または不規則

2. 言語が使用される時間数 (duration)

- a. 日に x 時間 y 分
- b. 週に x 時間 y 分
- c. 月に x 時間 y 分
- d. 不規則

3. このような言語を使う状況の起きる回数 (frequency)

- a. 初めて



- b. 時々
- c. よくある
- 4. 話題となる事柄 (events) の時制
  - a. 過去
  - b. 現在
  - c. 未来
- C. 場所 (place)
  - 1. 地理的位置 (geographical location)
    - a. 国
    - b. 地方 (州・県など)
    - c. 特定地域 (市・町・村など)
  - 2. 状況を作り出す場所 (place)
    - a. 屋外
      - (1) 広場
      - (2) 街路
      - (3) 公園, 庭園
      - (4) テラス (カフェなど)
      - (5) 運動をする場所
      - (6) 海岸
      - (7) 田園地方
      - (8) 森, 林
      - (9) 山
      - (10) 湖, 海
      - (11) 建造物
    - b. 屋内
      - (1) 私生活の場
        - (a) アパート
        - (b) 一戸建ち住宅
        - (c) 下宿
      - (2) 公共生活の場
        - (a) 店
        - (b) レストラン
        - (c) ホテル
        - (d) 学校
        - (e) 教会

- (f) 病院
- (g) 駅
- (h) 劇場
- (i) 展覧会
- (j) 事務室（商工業）
- (k) 事務室（サービス業）
- (l) 事務室（管理職，公官庁）
- (m) 事務室（知的職業）

(3) 仕事の間

- (a) 事務所
- (b) 作業現場

c. 交通機関

- (1) 乗用車
- (2) バス
- (3) 列車
- (4) 地下鉄
- (5) 飛行機
- (6) 船舶

3. 周囲の人々

- a. 家族
- b. 友人
- c. 知人
- d. 職場関係
- e. その他の活動を共にする人
- f. 社交界の人
- g. 休暇中に会う人
- h. 学習の間の人
- i. 無名，無関係，その他

4. 環境（言語学習上有意義と思われる場合）

II. 言語活動（language operations）

A. 機能（functions）

- 1. 単純表現，情報交換（単に情報を伝達するだけの公平無私な言語行為）
- 2. 描写，説明（説明，例証，知識の伝達など）
- 3. 論証，説得（物事の証明，説得すること，議論に勝つことなど）
- 4. 指示，陳述（人に何かを証言させることなど）

5. 喚起, 叙述 (過去のことについて語ること)
6. 要求, 命令 (何かを得るための言語行為)
7. 詩歌, 娯楽 (言葉の美と楽しみに関する言語活動)
8. 翻訳, 通訳 (すでに特定言語で表現されたことを別の言語で表現すること)

B. 言語行為の対象 (objects)

1. 情報, 通告 (公正無私な伝達内容)
2. 心情, 感情 (情緒に関係した伝達内容)
3. 態度, 行動 (態度, 反応, 精神的・肉体的行動)
4. 観念, 意見 (考えたり信じたりすること)
5. 行為, 事実 (過去・現在・未来における出来事)
6. 交際, 人間関係 (言語による社会的つながりを確立・維持・破棄する伝達内容)
7. 生物, 無生物 (人・動物・物などに直接関係のある伝達内容)

C. 言語行為の手段・方法 (means)

1. 自由な内容の話し言葉／直接聞く
2. 自由な内容の話し言葉／間接的に聞く
  - a. 電話
  - b. ラジオ
  - c. テレビ
  - d. 録音テープ
3. 限定された内容の話し言葉／直接聞く
  - a. 演説, 講義
  - b. 演劇, 朗吟
  - c. 朗読
  - d. 復唱
4. 限定された内容の話し言葉／間接的に聞く
  - a. 映画
  - b. テレビ
  - c. ラジオ
  - d. レコード
  - e. 録音テープ
5. 書かれた言葉／読む
  - a. 新聞
  - b. 通信文
  - c. 報告書
  - d. 本

## 6. 身振り／物まね

## D. 言語活動における必要事項の割り出し

上記の必要言語事項決定のための諸要素のリストは、すべての要素を徹底的に網羅したものとは言えないが、今回の研究には十分の内容のものである。

これらの諸要素から特定の個人が必要とする言語事項を決定するに当たって、すべての要素を平等に取り上げて考慮する必要はない。ただ、有意義と思われる要素を取り出して、それらを中心に検討するだけでよい。また、これとは反対に、一つの項目の中で二つ以上の要素が有意義であると考えられる場合には、それらのすべてを取り上げる必要がある。こうして、まず、意義深いと思われる要素のすべてをリストアップすることからこの作業は始まる。

次に、言語活動に必要と思われる事項を、これらの要素から割り出す訳であるが、まずどのような要素からどのような性質の言語事項を割り出すことができるのかを知っておく必要がある。

リヒテリッヒによると、言語活動に必要な事項は、(1)行動に関する必要事項、(2)言語（語彙と統語法）に関する必要事項、(3)伝達内容の利用・活用・創作に関する必要事項の三つに分けることができるとされている。これらのうち、行動に関する事項は「人」と「時」の諸要素から、言語に関する事項は「場所」、「機能」、「対象」の諸要素から、そして、利用・活用・創作に関する事項は「手段・方法」の諸要素から割り出すことができるとされている。この点については、詳しく説明するよりも、実例を見た方が容易に理解できると思われるので、次に、ヨーロッパではごく典型的と思われる例を幾つか挙げてみよう。

このようにして、言語活動における必要事項を割り出す作業が、ヨーロッパ式単位制度による言語教育計画過程の第一歩となる。次の段階は、これらの各事項ごとに学習単位を計画することである。

## 〔例1〕

項目	要 素	言語活動における必要事項
	1. 旅行代理店で働くフランス語を母国語とする人 2. フランス語を話す国で使われる英語 3. 職業に関係した一般的な内容	
I A 人	1 a(4)事務員, 1 a(10)旅行代理店, 1 e 女性, 3 a(6)買い手-売り手, 3 a(7)質問者-応答者, 3 b(1)尊敬, 3 b(6)思いやり, 3 b(8)中立, 3 b(15)礼儀正しき, 3 c(3)1人の話し手・聞き手+1人の聞き手・話し手, 3 c(5)1人の話し手・聞き手+複数の話し手・聞き手	○客に対する思いやりと、相手を尊敬した礼儀正しい態度
I B 時	1 d 常時, 2 a 日に4~5時間, 3 a 初めて, 3 b 時々, 3 c よくある	○初対面の人と気軽に話することができる
I C 場所	1 a スイス, 1 b フランス語圏, 1 c ジュネーヴ, 2 b(3)(a)事務所, 3 d 職場関係, 4. 事務室の雑音	○ジュネーヴを起点として旅行するのに必要な語彙
II A 機能	1. 単純表現, 情報交換, 2. 描写, 説明, 3. 論証, 説得, 6. 要求, 命令, 8. 翻訳, 通訳	○旅行代理店の従業員として、これらの機能および対象に合った語彙と構文を使う
II B 対象	1. 情報, 通告, 4. 観念, 意見, 6. 交際, 人間関係, 7. 生物, 無生物	○手紙を書く, 書類を作成する, メモをとる
II C 手段 方法	1. 自由な内容の話し言葉/直接聞く 2. 自由な内容の話し言葉/間接的に聞く 5. 書かれた言葉/読む	○話し言葉を容易に理解し、自分でも話す ○電話をかけることのできる語学力 ○パンフレット, カタログ, 通信文などを読むことができる

## 〔例2〕

1. イタリア語を母国語とするウェーター 2. フランス語を話す国で使われるフランス語 3. 職業に関係した一般的な内容		
項目	要素	言語活動における必要事項
I A 人	1 a(3)外国人労働者, 1 a(10)パリのカフェ (食事は出さない), 1 e 男性, 3 a(1)上司一部下, 3 a(2)同僚一同僚, 3 a(6)買い手-売り手, 3 a(8)初対面者-初対面者, 3 a(9)友人-友人, 3 b(1)尊敬, 3 b(2)服従, 3 b(5)連累, 3 b(6)思いやり, 3 b(8)中立, 3 c(3)1人の話し手・聞き手+1人の聞き手・話し手, 3 c(7)複数の話し手・聞き手+1人の聞き手・話し手, 3 c(9)複数の話し手・聞き手+複数の聞き手・話し手	○客に対する思いやりと相手を尊敬する態度 ○同僚および客に対する好感を持てる態度
I B 時	1 d 昼間と夜間の両方, 2 e 勤務時間のすべて, 3 a. 初めて, 3 b. 時々, 3 c. よくある 4 b 現在 (カフェの内外の事柄すべて)	○初対面の人と気軽に話すことができる ○雑音と疲労に対する持久力
I C 場所	1 a. フランス, 1 c. パリ, 2 a(4)テラス 2 b(2)(b)レストラン, 3 b 友人, 3 c. 知人 3 d. 職場関係, 3 i その他 4. カフェと街路の雑音	○カフェおよび日常生活に必要な語彙
II A 機能	1. 単純表現, 情報交換 6. 要求, 命令	○ウェーターの仕事において, これらの機能および対象に合った語彙と構文を使う
II B 対象	1. 情報, 通告, 6. 交際, 人間関係 7. 生物, 無生物	
II C 手段方法	1. 自由な内容の話し言葉/直接聞く 5. 書かれた言葉/読む	○高度の理解力 ○価格表や簡単な指示を読む

## 〔例3〕

1. イタリアへ旅行中の英語を母国語とする観光客 2. イタリア語を話す国で使われるイタリア語 3. 職業に関係しない一般的な内容		
項目	要素	言語活動における必要事項
I A 人	1 b(1)旅行者, 1 c. 40歳, 1 d. ボーンマス(英国), 1 e. 男性, 1 f. 既婚, 3 a(6)買い手-売り手, 3 a(7)質問者-応答者, 3 a(8)初対面者-初対面者, 3 b(5)連累, 3 b(6)思いやり, 3 b(8)中立, 3 c(3)1人の話し手・聞き手+1人の聞き手・話し手, 3 c(5)1人の話し手・聞き手+複数の聞き手・話し手	○自分が知らない言語で他人に話し掛けられても不自然に感じない
I B 時	1 d. 昼間と夜間の両方, 2 d. 不規則 3 a. 初めて	
I C 場所	1 a. イタリア, 1 c. ヴィアレージョ, 2 a(1)広場, 2 a(2)街路, 2 a(3)公園, 2 a(4)テラス, 2 a(6)海岸, 2 a(10)海, 2 b(2)(a)店, 2 b(2)(b)レストラン, 2 b(2)(c)ホテル, 2 b(2)(g)駅, 2 c(2)バス, 2 c(3)列車, 3 g. 休暇中に会う人	○旅行中の日常生活を営むのに十分な語彙
II A 機能	1. 単純表現, 情報交換, 2. 描写, 説明, 4. 指示, 陳述, 6. 要求, 命令	○休暇中の日常生活において, これらの機能および対象に合った語彙と構文を使う
II B 対象	1. 情報, 通告, 6. 交際, 人間関係 7. 生物, 無生物	○自分の言うことを相手に理解してもらい, 相手の言うことが少し理解できる
II C 手段方法	1. 自由な内容の話し言葉/直接聞く 5. 書かれた言葉/読む 6. 身振り/物まね	○簡単な指示を読むことができる

## 〔例4〕

1. スペイン語を母国語とする技師 2. スペイン語を母国語とする国で読まれるロシア語 3. 職業に関係した特定の内容		
項目	要 素	言語活動における必要事項
I A 人	1 a(6)管理職, 1 a(11)原子科学, 1 dマドリッド, 2 a 1人	○原子科学に関する語彙  ○原子科学の分野において, これらの機能と対象に合った語彙と構文を理解する  ○原子科学を扱った論文, 報告書, 本を読むことができる
I B 時	1 d, 昼間と夜間の両方, 2 c. 月に数時間, 3 b. 時々	
I C 場所	1 aスペイン, 1 cマドリッド, 2 b(1)(a)アパート, 2 b(2)(1)事務室(管理職), 2 c(3)列車, 2 c(5)飛行機, 3 d. 職場関係	
II A 機能	2. 描写, 説明, 3. 論証, 説得	
II B 対象	1. 情報, 通告, 4. 観念, 意見 5. 行為, 事実, 7. 生物, 無生物	
II C 手段 方法	5. 書かれた言葉/読む	

## 〔例5〕

1. トルコ出身の外国人労働者 2. ドイツ語を話す国で使われるドイツ語 3. 職業に関係しない特定の内容		
項目	要 素	言語活動における必要事項
I A 人	1 a(3)外国人労働者, 1 b(4)サッカー, 1 d. ミュンヘン, 2 d, 6~12人, 3 a(2)同僚-同僚, 3 b(5)連累, 3 c(9)複数の話し手・聞き手+複数の聞き手・話し手	○ドイツのアマチュアチームとサッカーができる ○同僚に対して好感が持てる態度で接することができる  ○サッカーに関する語彙  ○サッカーをするに当たって, これらの機能と対象に合った語彙および構文を使う  ○説明, 命令, 助言などを理解する ○必要とあらば, 説明, 命令, 助言などを与える
I B 時	1 b. 午後おそく, 1 c. 夕方, 夜 2 b. 週に3~4時間, 3 c. よくある	
I C 場所	1 a. 西ドイツ, 1 b. バイエルン, 1 c. ミュンヘン, 2 a(5)サッカー場, 3 eスポーツを共にする人	
II A 機能	1. 単純表現, 情報交換, 2. 描写, 説明, 6. 要求, 命令	
II B 対象	1. 情報, 通告, 5. 行為, 事実, 6. 交際, 人間関係, 7. 生物, 無生物	
II C 手段 方法	1. 自由な内容の話し言葉/直接聞く	

しかし、旅行代理店の従業員が必要とする言語事項、ウェーターが必要とする言語事項が明らかになり、これらに基づく学習単位が認定されたとしても、それらが、即、学習者の利益になるとは限らない。なぜならば、学習者が、学習しようとする言語の知識を全く持ち合わせていなかったならば、電話をかけるための学習単位や手紙を書くことに関する学習単位をどれだけ勉強したところで、全く収穫のないものになってしまう。

従って、これらの特定の言語事項に基づく学習単位に入る以前に、最低限身に付けておかなければ

ならない語学力が要求される。一体、どの程度の基礎語学力を持てば、次の段階の学習単位を有益なものとして利用することができるのか。これが、ヨーロッパ式単位制度のもう一つの課題であり、同時に研究を進めていかなければならない問題である。

次に続く林田論文は、日常生活において最低限必要とされる語学力のレベル、T-レベル(Threshold Level) について検討したものである。

#### 参 考 文 献

1. Richterich, René ; and Chancerel, Jean-Louis. *Identifying the Needs of Adults Learning a Foreign Language*. Oxford : Pergamon Press, 1977.
2. Trim, J.L.M. *Developing a Unit/Credit Scheme of Adult Language Learning*. Oxford : Pergamon Press, 1978.
3. Trim, J.L.M. : René Richterich : J.A. Van Ek : and D.A. Wilkins. *Systems Development in Adult Language Learning*. Oxford : Pergamon Press, 1980.